孫莘老寄墨四首（一〇八五年年正月五〇歳）

其　三

1 我貧如飢鼠　我 貧にして飢鼠の如く
2 長夜空齩齧　長夜 空しく齩齧す
3 瓦池研竈煤　瓦池に 竈煤を研し
4 葦管書柿葉　葦管 柿葉に書す
5 近者唐夫子　近者 唐夫子
6 遠致烏玉玦※　遠く 烏玉玦を致す
7 先生又繼之　先生 又た之に継ぎ
8 圭璧爛箱篋　圭璧 箱篋に爛たり
9 晴窗洗硯坐　晴窗 硯を洗うて坐し
10 蛇蚓稍蟠結　蛇蚓 稍 蟠結す
11 便有好事人　便ち 好事の人有り
12 敲門求醉帖　門を敲きて 醉帖を求む

※唐林夫 寄張遇墨半丸

【通釈】貧困を極めるわたくしの生活は、あたかもお腹を空かしたネズミが夜通し、やたらに何かをガリガリかじっているようなものである。書を書くにも、かまどの煤を集めてねった墨を瓦の硯で磨り、葦の茎の筆を使って柿の葉に書いている。ところが、さきごろ唐さんがはるばる烏玉玦の墨を送って下さったし、今あなたからまた続いて墨をいただいて、箱の中に圭や璧のような墨が輝くようになった。晴れた日の窓辺に硯を洗って坐る頃には、蛇か蚯蚓か、まがりくねった文字がとぐろをまいている。すると、物好きな人があらわれて、門をたたいて醉帖をいただきたいという。

【語釈】〇孫莘老…孫覚（一〇二八―一〇九〇）、字は莘老。高郵の人。胡瑗の門に出、進士となり、右正言に擢んでられ、王安石と善く、しかも意見を異にしたので、中央政界を離れたが、哲宗の時、御史中丞となり竜図閣学士に叙せられた。春秋経解十三巻の著がある。熙寧四年、広徳（安徽省）から呉興（湖州、浙江省）の太守に移り、翌五年二月に移り墨妙亭を作った。蘇軾は一〇七二年三十一歳の時、墨妙亭記を書いている。〇寄墨…墨を送ってもらった。郵送するのを寄という。〇齩齧…齩も齧も歯でかみきること。〇瓦池…瓦で代用しているような悪い硯。〇竈煤…かまどのすす。それを集めてつくったような悪い墨。〇葦管…葦の茎を軸にしたような粗製の筆。〇書柿葉…唐の鄭度は紙が買えなくて慈恩寺で柿の葉を集めていく棟にもなるほど貯え毎日これに習字し、幾年もたつうちにあらゆる葉に文字が書かれた、という。〇唐夫子…唐炯のこと。字は林夫。夫子は男子の尊称、先生。熙寧中、王安石の意を得て諫官となったが、安石を謗るに至って潮州別駕に貶せられ、監吉州酒税の官に移されて死んだ。父は詢 字は彦猷、のちその手書せる一絶句を得た東坡は、それに次韻した詩を作り、詢の書を併せて、子の炯に贈る。〇烏玉缺…墨の名。缺とは半環状の玉をいう。東坡みずからの注に張遇墨半丸という。張遇墨とは当時の有名な上等の墨で、宮中で眉を画くのに用いられた。〇圭璧…圭は頭のとがった矩形をした玉。璧は環状の玉で中孔の直径が環の幅に等しく作られる。〇箱篋…大きなはこ(箱)と小さなはこ(篋)。〇蛇蚓…へびとみみず。そのようなまがりくねった文字。〇蟠結…幡はわだかまる〇醉帖…酒のよいにまかせて書いた書。習字のお手本を帖という。草書に巧みであった僧懐素は醉帖をつくった。

其　四

1 吾窮本坐詩　吾が窮するは本詩に坐せばなり
2 久服朋友戒　久しく朋友の戒を服せしに
3 五年江湖上　五年江湖の上に
4 閉口洗殘債　口を閉じて残債を洗へり
5 今來復稍稍　今来復た稍稍
6 快癢如爬疥　癢を快くすること疥を爬くが如し
7 先生不譏訶　先生譏訶せず
8 又復寄詩械　又た復た詩械を寄せらる
9 幽光發奇思　幽光奇思発し
10 點黮出荒怪　点黮荒怪出づ
11 詩成自一笑　詩成って自ら一笑す
12 故疾逢蝦蟹　故疾蝦蟹に逢ふと

【通釈】今の私の窮亡の生活は、元はと言えば、自分が作った詩によって受けた罪のためである。（西湖の景色がどんなに素晴らしくとも詩は作りたまうな、との）わが友のいさめを久しく服膺していたつもりであるのに。この五年がほど江辺の田舎町で口を閉ざして負債を洗い流していたのが、近頃また少々ものし始めてみると、たまらなく痒かった疥癬を爪をたてて掻いて急にスーッとしたような気分であった。あなたはそれをお叱りにはならずに、再び詩を作ることの刑具（としてこの墨）を送り届けてくださった。深みのある美しい墨の光に、数奇な我が思いはあらわれ出て、黒々とした一点一点から、得体の知れぬ怪物がとび出してくる。かくて詩が出来上がって、自らちょっと苦笑する。かにを食べさせてもらって、またもや持病がおこったわい、と。

【語釈】○坐詩…罪に当てられるのが坐。○朋友戒…蘇軾が杭州通判となって赴任する時、文同が詩を贈り、「北客若し来らば事を問ふを休めよ、西湖好しと雖も詩を吟ずること莫れ」といったのを指す。○五年江湖上…黄州にいたのは元豊三年二月一日から七年四月一日までで、四年と二か月、あしかけ五年。○閉口…災をうけないよう発言をひかえていること。○残債…負債の残り。時政を批判する詩を作ったことを罪され、（その時の取り調べの記録、烏臺詩案）黄州へ流されたのが債務を背負ったことになる。黄州における生活は残債の償還である。○稍稍…少しく。韓愈の蝦蟇を食うという詩に「余は初め喉に下らず、近ごろ亦だ能く稍稍」○快癢…癢は痒と同じ。皮膚のむずがゆいこと。○疥…皮膚病の名。疥癬。○譏訶…詰問するのが譏、大声で責めるのが訶。○寄詩械…械は刑具。危い詩を作らないようにはめておく手かせ足かせ。そういうものを送って来たとは墨をもらったこと。孫莘老が墨を送って来たのは、東坡が良い墨を得て書を楽み、詩を作ることを忘れるようにとの意図であると自ら解釈し、以下の戯れの句を展開する準備とする。○幽光・點黮の聯…孫覚にしてみれば墨を送って東坡に書を楽んでもらうつもりだったろうが、孫覚の期待とは逆に、墨によって詩情が誘発される。○點黮…くろいぼつが點。桑の実のくろいのが黮。○荒怪…荒はとらえどころのない大きさ。怪は怪力乱神の怪、神怪。○故疾…持病。詩を作りたがる病、としていう。○逢蝦蟹…墨をもらったことをいう。えびやかにを食べると体質によって皮膚に発疹が出る。

蘇東坡　近藤光男より抄出